様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２２０６
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｈ０７１５３

研究課題名（和文）障害のあるシリア難民を対象とした生活実態調査と障害者難民支援モデルの構築

研究課題名（英文）Research for Syrian Refugee with Disabilities in Turkey

研究代表者
石井　清志（ISHII, Kiyoshi）

国際医療福祉大学・成田保健医療学部・助教

研究者番号：４０７８３５０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は障害のあるシリア難民を対象にトルコをフィールドとした研究である。期間中にトルコ国内の治安の悪化などがあったが、シャンルウルファ県と首都のイスタンブールの2カ所で現地調査を実施した。2回の現地調査で20件以上の障害のある難民の自宅を訪問しインタビュー調査を行った。
　インタビューの結果から内線が始まってから5年以上が経過した現在でも、医療や教育、就労などの面で様々な困難に直面していることが明らかとなった。また、それらの課題を乗り越えていくには障害の社会モデルを用いつつも公助に頼らない、市民レベルでの人道支援と多様な背景を持つ対象者の個別性に対応しうる専門職の必要性も明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：We conduct two-field survey to grasp the living situation of Syrian Refuges within Turkey during the period of this Study. Five Years have passed since 2011 the year of Conflict started in Syria; situation of near border area in Turkey was un-stable. As the result of field survey, a Syrian refugee with disability still faces various challenges of daily living in Turkey their neighbor country. In terms of HR, person who has the ability to accept their background is going to be demanded in order to overcome the current situation.

研究分野：リハビリテーション分野における国際協力

キーワード：シリア　難民　トルコ　障害者

１．研究開始当初の背景

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）によると、アラブの春を契機に 2011 年から始まったシリア国内での紛争により、約 400 万人のシリア難民が発生したといわれている。

やがて国内での紛争は内戦となり、発生から 5 年以上が経過した現在でも収束しておらず、第二次世界大戦以降の世界において最大の難民問題と言われている。そのため、このシリア難民の問題は周辺国だけの問題としてではなく国際問題として国際社会のあらゆるレベルでその解決策が議論されてきた。しかしながら、領土、宗教、民族、歴史といった様々な要因を背景に、大国や隣国の思惑もあいまって、解決には至っていない。そして、今現在もシリア紛争の先行きは不透明であり多くの難民が隣国での生活を余儀なくされている。

そのような状況において、障害者はどのような生活をしているのだろうか。WHO の統計によると、人口の 10%～15%が障がい者であるといわれているが、その数値をそのまま用いると、400 万人の難民の中には何らかのかの障害を有する難民が 40 万～60 万人いると推計できる。しかし、難民でなおかつ社会的弱者の中の弱者とされる障害者の生活にかんする情報は非常に限られており、国際 NGO が発表する年次報告書にその惨状がわずかに記載されている程度となっている。さらに、実際の難民支援の現場においても障害者への支援の優先度は高いものの、支援自体のニーズが主に健常者の意見や視点をふまえたものとなっている場合が多いことから、障害者が持つ多様なニーズに適った支援になっておらず、十分な支援が得られてないという現状がある。

２．研究の目的

このような状況の中で、本研究ではこれまであまり焦点が当てられてこなかった難民の中でも特に障害のある難民に注目し、それらの人々の生活状況を明らかにすることを目的とする。さらに、明らかとなった障害のある難民の生活状況から、それらを対象とした支援手法の在り方についても考察する。

３．研究の方法

本研究では文献調査とインタビュー調査を実施する。文献調査はこれまでに国内外で実施されてきた、内戦や災害時における難民支援および障害者支援に関する論文や事例を対象に行い、本研究の対象である障害のある難民への支援手法について検討するための基礎情報を収集する。

インタビュー調査はトルコ国内で難民支援の実績を有する国際 NGO の協力を得て、同国とシリア国との国境付近の街をフィールドに実施する。インタビューの対象者は障害のある難民とし、研究代表者と通訳、障害について専門知識をもつシリア人の理学療法士の 3 名で難民キャンプ等を訪問し半構造化面接を実施する。主な質問事項については、事前にアラビア語で質問を作成する。質問内容は住居、経済状況などの生活環境に関するものと障害の状況や日常生活の状況に関するもの、今後についての自由記載項目とした。

４．研究成果

研究課題採択後の 2016 年以降も内戦の影響によりトルコ国内の治安が悪化することもあったが、国境付近のシャンルウルファ県と首都のイスタンブールの 2 カ所で現地調査を実施することが出来た。当初は難民キャンプでのインタビューを検討していたが、シリア難民が避難している難民キャンプへの外国人の立ち入りは、トルコ政府によって制限されていたため、障害のある難民の自宅を訪問しインタビューを実施することとした。

合計 2 回の現地調査では 26 世帯（第 1 回：11 世帯、第 2 回 15 世帯）の障害のある難民の自宅を訪問した。対象者の選定は安全管理上の理由から、協力団体である現地 NGO の協力の下で決定し、生まれながらに障害のある脳性麻痺児・者や内戦による負傷等によって何らかの障害が生じたものなど、主に身体障害のある難民となった。

2017 年に実施した第 1 回現地調査対象 11 名）の結果を以下に記載する。住居については対象者全員が、借家に兄弟姉妹や親戚と一緒に複数の家族で居住しており、その中でも若い男性の労働により家計が支えられていることが明らかとなった。対象者の身体機能については、11 名のうち 9 名の対象者の歩行が全介助レベルとなっており、日常生活活動についても 9 名が着替えやトイレ、入浴（シャワー）に介助を要すると回答した。

次に対象者または介助者の心理状況に関する回答では全員が「不安を感じる」また「イライラする」のいずれかを回答していた。

その他の生活状況として、主な介助者は配偶者や親が主に担っていること、そして日中はほとんど外出することが出来ておらず、家で過ごしていることが明らかとなった。

公的な補装具支給などの利用状況については，いずれの障害者も使用しておらず，理由として，シリア難民なのでトルコの公的サービスを利用することが難しいとのことであった．将来について対象者に自由に語ってもらう設問では，医療支援の不足や今後への不安が語られており，厳しい状況下での生活で疲弊している状況がうかがわれた。

次に第 2 回現地調査（対象者 15 名）の結果について以下に述べる。第 2 回目の調査は第 1 回目同様に難民のある障害者の自宅を訪問して行ったが、フィールドを国境のシャンルウルファ県から首都のイスタンブールに

変更して行った。
　インタビューでは第１回目の結果と同様に借家に複数の家族で居住することで何とか生計を立てている世帯がほとんどであった。しかし、就労の機会は比較的多くシャンルウルファ県の難民よりも経済的な困難さの程度は低いことが分かった。その一方で、避難生活の長期化にともない、それまで支援を受けていたNGOによる物資や経済的な支援が終了したことで、教育や医療の機会を制限せざるを得なくなるなど、支援に頼らざるを得ない状況であることにかわりないことが明らかとなった。今回のインタビューでは将来についての質問も設定した。その結果を以下に示す。

【「将来について」の対象者の語り】
・現在の状況では将来のことを考えることが難しい．毎日ベッドで過ごしてばかりなので，一日一日，体力が落ちてきていると感じる．こんな状況では前向きな気持ちになれない．
・ここには義足もなく，十分なリハビリを受けることが出来ていない．ヨーロッパに行けば義足を作って歩行訓練をしたり，十分な治療を受けることができるのではないか．そして，将来的には仕事もできると思う．
・大きくなってお母さんを助けたい．
・支援も不十分で，生活にも苦労してる状況だが我慢して過ごしている．どうにか以前のように歩きたい．
・内戦の状況も自分たちの暮らしも，これからよくなっていくと信じています．ただ，このままの生活が続くようであれば別の国に難民として移ることも考えなければいけないと思っています．
・生活が安定していないので，心配な事が沢山ありすぎてどうしてよいかわからない．
・子どもはまだ小さいので，成長とともに身体機能もよくなって将来は歩けるようになることを願っている．
・子どもが歩けるようになるために，適切な医療が受けれるようにしてほしい．
・子どもが健康に過ごせて，さらに体の状況がよくなることを願っている．
・昔のような普通の生活に戻りたい．
・時間の経過とともに，体の調子は悪くなっている気がする．そのため，将来についてあまり希望を持つことが出来ない．

　以上、インタビューの結果から内線が始まってから５年以上が経過した現在でも、医療や教育、就労などの面で様々な困難に直面していることが明らかとなった。また、障害のある難民の状況や支援ニーズは非常に個別性が高く、それらの課題を乗り越えていくためには、国、県などの行政レベルからNGO等の市民レベルまでのあらゆるステークホルダーの長期的なコミットメントが必要であることが分かった。
　支援手法については前述の通り、対象者の個別性に対応することが求められるため、それらのニーズを理解し柔軟に対応できる人材が急務とされていた。
　なお、本研究の成果は昨年度に引き続き、2018 年度に開催される学会に積極的に発表する予定である。論文投稿についても、作業療法関連の雑誌等への投稿を検討している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）
障害のある都市型難民を対象としたインタビュー調査～シリア難民を対象としたトルコ国での現地調査結果の報告～
（千葉作業療法、Nol8, No1, P2-P8, 2018）

〔学会発表〕（計１件）
トルコにおけるシリア難民支援の現状と障害者支援―web サイト上のテキスト分析から見えてくるもの―
（日本作業療法学会，東京，2017）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０ 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
石井　清志（ISHII Kiyoshi）
国際医療福祉大学・成田保健医療学部・助教
研究者番号：40783501

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし